

【山形県内水面漁場管理委員会へ平成28年10月17日に提出】

特定非営利活動法人おもだか水辺の生き物保全会

再放流禁止に対する当保全会の意見

1 ブラックバス侵入による被害

私たち保全会は水辺の在来種の保護と復活活動をしています。ブラックバスによってその努力が水泡に帰すこともしばしばありましたので、在来種の保護と復活にはブラックバスの駆除が絶対に必要であることを強く認識いたしております。ブラックバスが侵入したほとんどの水域では、生き物の存在を感じさせない「死の湖」を思わせる状態となりました。

ブラックバスによる環境破壊は可視的な破壊だけでなく、ミクロの段階でも起きています。まだブラックバスがいない健康的な水域においては、水中に増加した有機物が多種多様な生き物によって分解や搬出が行われ、富栄養化に歯止めがかかっていますが、ブラックバスの侵入によってそのシステムが破壊されて浄化機能を失い水質の悪化が生じます。

また、ブラックバスの影響は単に環境破壊だけでなく、豊かな自然を守ってきた地元の人々の心をも食い破っています。「〇〇堤（ぜき）」などと呼ばれている所は、しばしば地域のシンボルとなってきました。地域の人々は、堤のほとりに桜を植栽してみんなで花を楽しみ、千年以上または何百年も前から社や祠を建てて、心の苦しみから救いを求めこれからの幸せを願う心の拠り所としてきました。そのために集落の人達が総出で草刈りや堤の修復作業をするなどして、大切に守ってきました。人口減少が進んでいる昨今は、殊更、住んでいる人たち自身の地域を見直す機運が高まっていて、堤などに人が集まれるように努力していますが、ブラックバスがその気持ちを情け容赦なく微塵に砕いています。今、農村などでは、今も続いている急激な経済活動の変化に必死に耐えているのに、さらに追い討ちをかけるようなブラックバスによる仕打ちを受けているのです。

ブラックバスが山形県内で猛威を振るい始めたのは、約四半世紀前です。それ以降に子ども時代を過ごした大部分の人たちは、止水域の魚と言えばブラックバスしか知らない状態となってしまいました。「釣り」＝「ブラックバス釣り」となったと言っても過言ではありません。私たちはバス釣りの人達とも仲良くお話ししながら、いろいろとお聞きしています。そうすると、「バス釣りそのものが面白い」と言う人がいる一方、「他の魚を釣りたいがバスしかいない」という人が実に多いようです。バス以外の魚を釣りたい多くの人た

ちは愛好会などを組織していませんので、その声は行政機関等へは届かないと思いますが、逆にバス釣り専門の人たちは愛好会などを組織していますので、声を大きくすることができます。行政機関は、声なき声もしっかりと聴く姿勢が必要です。地域の豊かな自然は、地域のアイデンティティや誇りにつながる要（かなめ）の役割を果たしています。多様性ある自然は、山形県が目指している風景にもなっているはずです。

2 再放流について

「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」によって、ブラックバスが「特定外来生物」に指定され、放流、飼養等が禁止されたものの、侵入した外来生物の駆除、拡散防止、再放流（リリース）禁止については、何ら実効性のある規定が盛り込まれていません。そのため、駆除活動などは、被害者である地元の人々が頑張らなければならないのが実態です。駆除作業が行われていながら、同じ場所で再放流が行われています。再放流が認められていることによって、ブラックバスの存在をも認められていると認識されているようで、ブラックバス釣りは一向に減少しません。そればかりか、一部の釣り人は「ここは俺たちのバス釣り場だ」とさえ曲解して、他の人の活動にも苦情を言うことさえあります。他人が管理する水域に来て、まるで我がものであるかのように仕切る釣り人がいるのも事実です。これでは、一般の人が益々、近付けない水域になる訳ですし、さらに密放流しやすい状態にもなっています。

再放流が普通に行われていれば、いくら駆除作業がなされて、かつ法律で禁止されても、密放流に対する抵抗感がなくなります。また、一般人が近づくかない現状では、密放流を監視する「目」がありません。

以上により、ブラックバスの再放流禁止は、平成29年6月1日を待たないで、できるだけ速やかに実施して下さるよう強くお願いします。

3 ブラックバスについてのデマ流布

今、ブラックバスの繁殖に関するデマが意図的に流されています。一つは空からの経路でブラックバスの卵が運ばれているというものです。水草などに付着した卵が水草などと一緒に水鳥によって他の水域に運ばれて繁殖するというものです。しかし、そもそもブラックバスは産卵のときに水草などに付着させません。そして何よりも魚の卵というものは極めて繊細で、水鳥が空を飛んでいるときの乾燥にはとても耐えられません。ブラックバスが密放流によるものであることを隠蔽するために、意図的に流されたデマです。

もう一つは、駆除時にブラックバスが泥に潜って生き残るというデマです。ドジョウや雷魚などは、鰓呼吸の外に空気呼吸もしているので、かなりしっかりと泥に潜れるのですが、比較的、富栄養な水域に生息できる鯉、鮒でさえも、泥に潜る能力は格段に劣ります。ましてや酸素が豊富な表層で生活しているブラックバスは、泥に巻き込まれることはあっても、自ら潜るのは泥水程度で、泥に潜ることは不可能です。泥に入ってしまうと鰓呼吸が困難になって死んでしまいます。ブラックバスを鯉や鮒と一緒にバケツに入れてしばらく置くと、鯉と鮒が元気なのにブラックバスは酸欠で死んでしまいます。かなり高い酸素濃度を必要とするようです。駆除時に生き残っているのは見逃しやすい稚魚です。駆除作業から2年ほどは食害の程度は小さいのですが、3年目にもなると20cm以上に成長して手当たり次第に食害します。そこで、「ブラックバスが泥に隠れていた」と思われたとも考えられますが、それよりも「ブラックバスが泥に潜って隠れる」とデマを広めれば、駆除を無駄と思わせて駆除活動を邪魔させる効果があります。そして完全に駆除した後で密放流によって再度、繁殖しても、密放流を隠蔽することができます。

このようなデマがかなり広がっています。山形県の専門的な職員によって正しい知識を拡げていただくようお願いします。